

りょう かん 「良 寛さま」

平成22年 3月 第1週目 放送

きみみ そうがん かた うれ な に さくしゃふしょう
「君観よ双眼の色 語らざれば憂い無きに似たり」という作者不詳の漢詩があります。「あなた、この
眼を観てごらんさい。何にも語らないから、^{うれ}憂いがないように見えるけれど、眼の奥には、悲しみや切なさがあるのだよ」といった意味になります。

人から書を頼まれた時に、この詩を好んで書いたのが、^{りょうかん}良寛でした。

えちごいずもさき えどころき そうとうしゅう そうりよ
良寛は、1758年に越後出雲崎に生まれ、1831年に七十四歳で没した、江戸後期の曹洞宗の僧侶です。

ななり くがみやま ごごうあん いおり
良寛は、生まれ故郷出雲崎から七里ほど北にある国上山の、五合庵という庵に住んでいましたが、時々、
くた まり
山から下り、村の子どもたちと、毬つきやかくれんぼをして遊んでいました。子供たちは笑いさざめき、良寛も
笑みを浮かべながら楽しんでいる、そんな光景が、良寛自作の漢詩や歌から浮かび上がってきます。

そんな良寛が好んだのが「眼の奥には、悲しみや切なさがあるのだよ」という、^{さき}先ほどの詩なのです。

らくさ
良寛の笑顔と、この詩との落差は、どういうものであったのでしょうか。

じいん えちご ほうこう ほし きざ
群馬県のある寺院に、江戸時代、越後より奉公に来た十代の少女たちのお墓があるそうです。墓誌に刻まれ
くがみやま ねむ
た字をたどっていくと、このお墓には国上山周辺の村の少女たちが眠っていて、生まれた年、亡くなった年が、
くがみやま いおり
良寛が国上山の庵に住んでいた時期と重なるのです。

くた まり としごろ みくにさんち こ ほうこう
良寛が山を下り、毬つきやかくれんぼをした子供たちは、年頃になると、険しい三国山地を越え奉公に行
けんめい すえ からだ こわ わかく いのち
き、懸命に働いた末に、体を壊し、若くして命を終えていったのです。

いっかい ぜんそう
良寛は、すべてわかっていたのでしょうか。しかし、一介の禅僧である自分には、どうすることもできない。
あそ たわむ せいっぱい
せめて、目の前にいる、いたいけのない子供たちと遊び戯れながら、精一杯の笑顔をあげるしかないという
ひ
、はりさけそうな思いを心の中に持っていたのだと思います。良寛の笑顔に秘められた思いが立ちあがってきます。
す。

しかし、良寛は、自らの心の奥底にある思いをわかってもらいたいがために、この詩を好んだのではないと思
います。

さまざま ひょうめん ちゅういぶか み
人の心や様々な出来事の、ただ表面のみ見るのではなくて、じっと注意深く観なければならないことを、
いまし
自らに戒め、また人に伝えようとしたのではないのでしょうか。
くがみやま ふもと まり はいご じじつ まんめん
国上山の麓で、毬をつきながら、良寛は、確かに、子どもたちの背後にある事実を、満面の笑顔を浮か
べながら、じっと観ていたに違いないのです。